

対談

ブクシマ

にみる

文明の転換

げんゆう そうきゅう

玄侑宗久

しまぞの すずむ

島蘭 進



島園 本号特集テーマが「大災害と文明の転換」という

ことでして、私は震災後の日本の文化や宗教の働きに大きな変化があるのではないかと考えています。人々の心が宗教に戻ってきているのではないかというのが一つの推測です。福島県に根を降ろしておられ、道家思想にも造詣が深い玄侑さんにご自身のことをいろいろとお話いただければ、自ずとそのような話題も出てくるのではないかと思います。玄侑さんは、若い頃、中国文学をご研究されていたのですよね。

玄侑 はい。ただ、専門は現代喜劇だったんです。諸子百家の思想に深く興味をもつようになったのは四〇歳を過ぎてからです。

島園 講演などでは莊子や道教のお話もだいぶ出てきているようですが。

玄侑 諸子百家は国家の発生ということと深く関わってくると思うのです。いわゆる今のネイションにあたるものではなくステイトということですが、それが発生するのが中国においては春秋戦国時代です。そのステイトを全否定するのが老子なんですね。小国寡民の思想とい

って成立する。その国民国家の原理が、そのまま経済という別の原理のなかにも移し込まれてくわけですが、原子力というものも、巨大な中央集権が経済の世界でも構築されていくなかで登場してきたと思うのです。

ですから、本書の言うように文明の転換があるとするならば、巨大な集約的システム——それが解体するのは無理でしょうけれども——から、もう少し個別に自治がなされるようなあり方へ、転換が求められているのではないかという気がします。いきなり結論的なことを言ってしまうましたが(笑)。

島園 今度の震災で東北は大変な災難を受けたわけですが、今後さらに人口が流出することが懸念されますし、巨大な集約的システムのなかで経済発展のための投資がなされるということも考えられます。集約的に経済センタ―が育てられていくと、その一方で地域社会は衰退の危機に瀕するという心配があります。他方、だからこそ逆に未来を照らし出すという側面もあるのではないかということを考えることができるかもしれない。危機に瀕した地域社会に新たな生き方が育ってきて、先ほどおつ

ますが、自然発生的なコミュニティのみが大事であって、それ以上の大きな組織は搾取団体といってもよいという考え方です。莊子の考え方もそれに近いと思うのですが、はっきりしたことは言わない。しかし、楚の国から宰相として招かれたときには、「剥製になるよりも泥の中で遊んでいたい」と言って断つたりする。要するに国家というものに反対あるいは無関心であつたのが老子、莊子なのです。

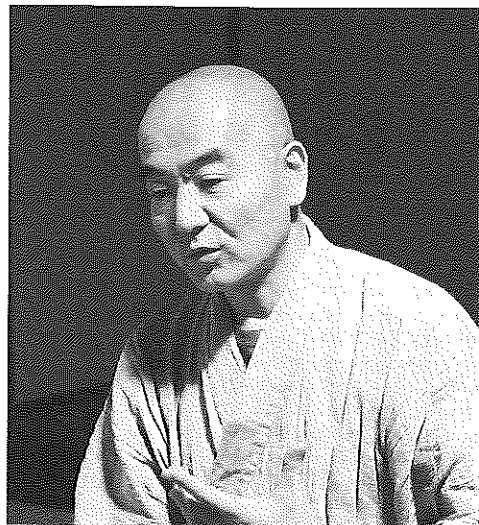
一方、孔子、荀子、墨子——墨子の立場はまた微妙なのですが——、韓非子などの他の思想家たちは、いろいろな諸侯に、国家の運営の仕方について提案して取り入ろうとする。つまり国家を認めているわけです。そこに、老莊と他の思想家とを截然と分かつ一線があるのです。日本で最初に国家がつくられたときには、儒・仏・道という三つの理念が用いられたわけですが、道教がいつのまにか外されますよね。やはり、国家理念として適当でないということが分かってきたのだと思います。

国民国家(ネイション)の場合は、ステイトを統合するという意識が——たとえば戦争によって——高まっている

しゃつた個別性への方向へと自ずから向かうような気もするのですが、いかがでしょうか。

玄侑 どうでしょうね。残念ながら私はそうとは思えないですね。最近、小規模農家に土地の貸借を持ちかけて土地を集約し、巨大な農家を作ろうとする動きがあるでしょう。集約化して強くなるという発想が捨てられないのですね。その点、今回の震災を教訓としてしっかりとつかんでいないのだと思います。

そういう動きは、つまりはこの機に乗じてマーケットで勝てるようなシステムを作りたいということなのでしょう。今回、被災状況のなかで東北の人々のあり方が称賛されたというのは、東北には、市場原理の枠組みから離れた人間関係がたくさん残っていたということだと思ふのです。たとえば、東京などの都市では、人とお茶を飲んで話をするのも、喫茶店やレストランなどを使うわけですから、ひとつの経済行為になります。しかし東北では、お茶を飲み、人に集まるということが普通にあって、一〇時や三時はお茶を飲み、人を訪ねてもいい時間なの



玄侑宗久氏

です。人が訪ねてきても、家にあるものを出せば済むわけですから、いわゆる市場経済は全く動かない。しかし、こうした人づきあいがこの辺の人々には欠かせないものなのです。そのような市場原理外の営みが根強く残っていますから、そういう人と人とのつながり——しばしば東北の遅れた部分だと思われる面なのですが——が今回はいい意味で表面化したのではないかと思います。私のお寺では、いまだに炭で火をおこして、鉄瓶でお

茶を入れて仏様にお供えすることから一日が始まります。もちろん、ガスがないわけではないですよ。しかし、六七〇年以上も続いてきたことですから今後も続けていきたいし、その炭も近所で作られてほしいのです。炭はいま非常に高価ですが、しかし、安いからということとで外国からの輸入品を使うというのは嫌なのです。とにかく何でも集約化することによって、毎日の暮らしに必要な品々が自分の住んでいる地域では賄えなくなるということには大反対です。

島園 今おっしゃっていたような人づきあいのあり方は、現代ではだんだん少なくなってきたように思うのですが、お茶を飲みを訪ねてくるという風習は若い人たちにも受け継がれているのですか？

玄侑 サラリーマンは別なルールになってしまいましたが、職人たちはそのような生活を受け継いでいますね。農業などの第一次産業も、そうした風習を基本的には守っているように思います。

勤園ということもあるのでしょうか、まだ街並みに首都圏という雰囲気があったのが、白河を越えるとだいぶ風景が変わってくるような（笑）。

玄侑 「白河以北一山百文」ですか（笑）。今でもそういうことはあるのでしょうか。実際には福島は首都圏への通勤圏ですけれどね。ただし、新幹線を使わざるを得ないので部長クラス以上でないと無理ですが。

島園 宮城県だと仙台を中心とした一極集中的な大都市

を形成していますが、福島はそれと比べるとやや分散的であり方があって、地域主権的な考え方がなじみやすいということはあるのでしょうか。

玄侑 そうだと思います。そのせいかどうかはわかりませんが、福島は歴史的に中央に強く反抗したところ。自由民権運動がその典型だと思いますが、今では考えられないことですが、当時は議会をつくるということが中央への反抗だったわけですからね。初代国会議長は河野広中という人なのですが、三春町出身です。また県議会というのが発足したのも福島県が全国で最初でした。議会をつくるということによって、統治の際に地方に注意しないといけないという意識を中央にもたせるといふことですが、そういうことも原発の立地の問題に絡んできていると思います。

最初、官選知事として三島通庸が送り込まれてきて、新潟、福島、群馬を結ぶ会津三方道路を造ろうとしました。今で考えるとそのような道路は絶対に必要なのですが、当時、あまりに労役が厳しくて反対運動が起り、官選知事が追い出されるのです。その反対運動のリーダー



島園 進氏